

もに、「どちらとも言えない」という回答も各項目で3~4割あった。誘導の要素の少ないアンケートとして実施できたと思われる。以下、紙幅の都合上、特に重要と思われる項目に絞って結果を紹介したい。

### 3. 条件ごとの動物の致死処置に関する許容度

一般市民が致死処置を許容できるか考えるとき、動物の位置づけごとに、またシチュエーションによって異なるのは予想される場所である。ただし、様々な魚類や昆虫類、害虫なども含めて聞くと、項目が多くなりすぎてしまうことから、基本的には乳類・鳥類を想定させる表現

で、また実際に起こりうる状況を考慮して23項目に絞って質問することとした。

概ね3割程度の「どちらとも言えない」の回答があるが、項目に応じて回答にはバリエーションが見られ、人と動物の関係、致死処置をめぐる認識が浮かび上がってきたと言えよう。

#### 【許容派が半数を超える項目】

1. や2. に見るとおり、犬や猫、動物園の動物など終生飼養が前提とされている動物であっても、終末期で強い苦痛がある場合には、7割近くの回答者が致死処置を許容すると答えている。愛情深く飼育されてきた動物が目の前にいて苦しんでいる場合には苦痛の軽減も考えるという発想

は、広く獣医学的な判断基準の必要性を意味しているのではないだろうか。

次に、8. から14. までの人獣共通感染症、伝染病対策については、家庭動物、動物園動物、野生動物、畜産動物などの位置づけに応じて若干の差はあるにせよ、人間にとっても動物にとっても、その生命や健康を守るために6割程度の回答者が致死処置を認めている。

野生動物に関しては、6. 人身事故の発生時、7. 人身事故発生のリスク、17. 農作物被害の発生時、18. 外来種対策において、5割を超える回答者が、致死処置を認めざるを得ないとしている。外来種の殺処分については、か

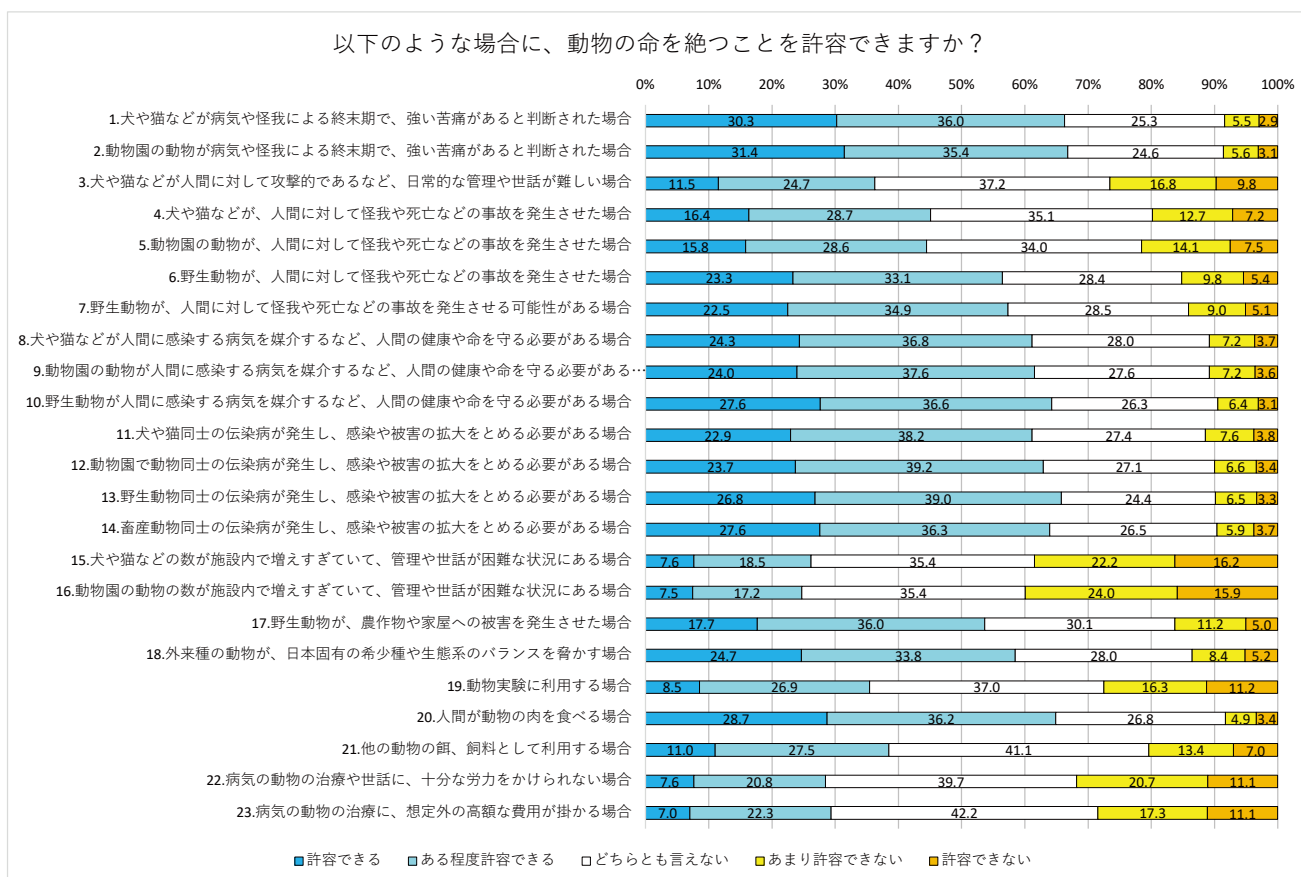


図1 条件ごとの動物の致死処置に関する許容度

致死処置の判断根拠を素人なりにも吟味していることが考えられる。

それから、全ての項目で「許容できない」と答えた回答者は27人(0.8%)、すべての項目で「あまり許容できない」か「許容できない」のいずれかを選んだ回答者は56人(上記0.8%を含む1.7%)であった。真正のノーキル思想は広がっていないと言える。

にもかかわらず、動物の命を絶つことに対する批判の声(保健所での殺処分ゼロ運動、畜産業・と畜業への非難、動物実験への偏見など)が強いように感じられるのは、何故だろうか。一つには、動物の致死処置をめぐる部分的・局所的な情報だけに注目する(残酷さが強調され

る)議論の立て方が広がっており、かつ一般市民がそれらの言説との距離の保ち方を見つけ出せていないことに原因があるろう。

動物の致死処置に関する状況や判断の根拠、それらの必要性について、公的機関や専門家側からの総合的・多面的な情報発信が必要であるとする。

#### 4. 動物の致死処置への考え方

##### 【結果の概要】

動物の位置づけや状況を特定するのではなく、致死処置に関わる大枠の価値観を問うた結果はグラフの通りである。賛否両論あり得る項目を列挙しているため、多くの項目で4割程度の「どちらとも言えない」の回答がある。とはいえ、賛否の度合いも項目ごとに異なり、回答者自身

も悩みつつ回答してくれたことが分かる。

第1に、動物の苦痛に関して、1. 苦痛のない致死処置への容認や、2. 苦痛のある動物への積極的な安楽殺については、4割の「どちらとも言えない」という悩みの声があるにせよ、半数以上の「そう思う」「ある程度そう思う」という賛同があった。

第2に、致死処置に際してのシステムや根拠に関して、3. どんなに金額や労力が掛かっても苦痛を与えない方法、4. 判断根拠についての説明責任については、過半数の回答者が、「そう思う」「ある程度そう思う」と書いている。苦痛を与えない致死処置について様々な努力が求められ、また根拠についても一つの質問に答えられるような準

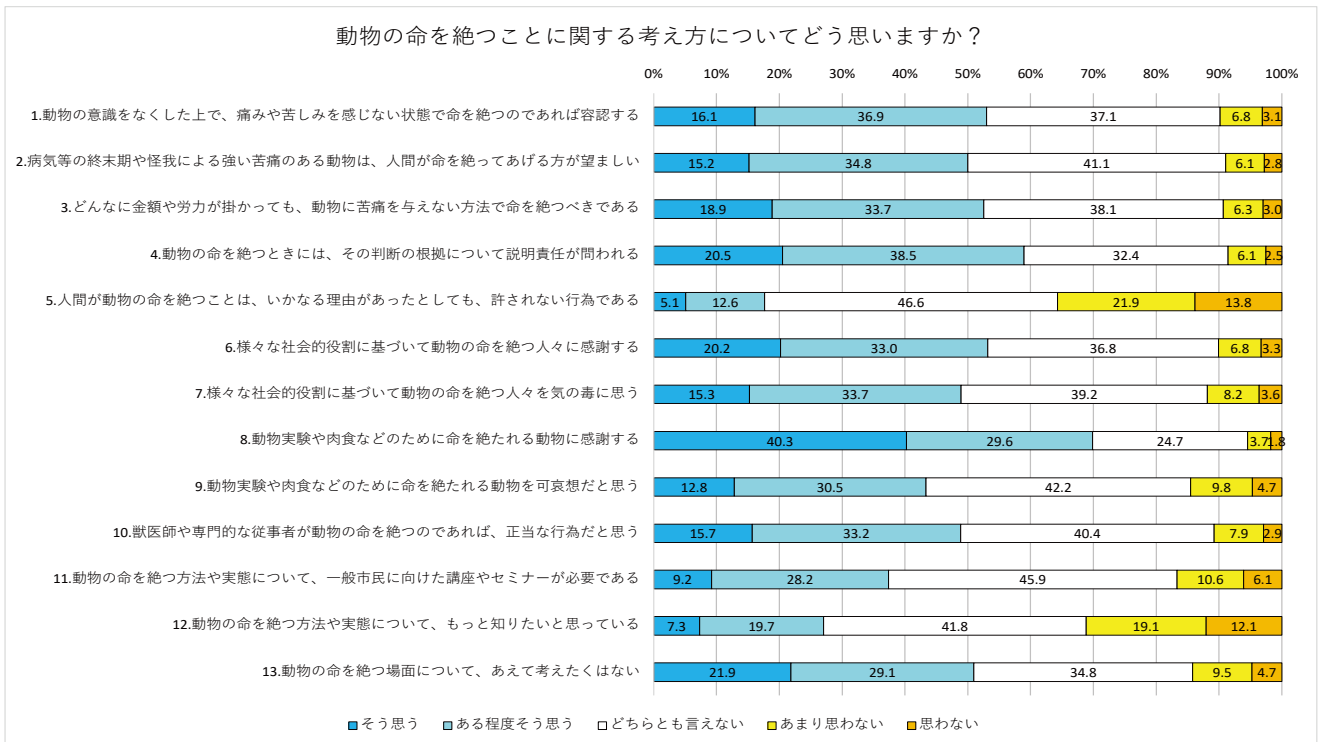


図2 動物の致死処置に関する考え方

備、基準やチェックリストなどを用意していく必要がある。

第3に、致死処置をめぐる倫理的課題について、「5. 人間が動物の命を絶つことはいかなる理由があったとしても許されない行為である」という表現で賛否を質問した。結果として、「そう思う」「ある程度そう思う」を合わせて17.7%となった。ただし、それがどこまで徹底した回答であるのかは分からない。他の項目と比較しても、回答に矛盾やぶれがある。「仕方ないとはいえ、本来ならば許されるべきではない」という発想であるのかもしれない。

第4に、作業員や動物への印象として、6. 致死処置を行う人々への感謝、7. 致死処置を行う人々への同情、8. 犠牲となる動物への感謝、9. 犠牲となる動物への哀れみ、10. 専門家による作業の

正当性に関しては、8. 以外はほぼ同様の結果となった。作業するのは気の毒だが感謝しており、動物も気の毒であるが、獣医師や専門家が作業するならば正当だと思うという感覚は、日本人の平均的な認識なのであろう。また、8. の動物への感謝への共感が高いのは、子どもの頃から「いただきます」の言葉で命を食べるという習慣や価値観が根付いていることを示しているのかもしれない。

最後に、知識や情報への主体性を問うために、致死処置の方法等について、11. 一般市民向けのセミナーの必要性、12. 自分が知りたいか、13. 敢えて考えたくないかについて確認した。4. で説明責任が問われると回答しながらも、この3つの項目の結果を見ると、自分自身はさほど知りたくはない、考えたくはない

という回答者も多い。動物の利用・犠牲の上に私たち人間の暮らしが成り立っている現実について、もう少し一般市民にも当事者意識を持ってもらいたいというのが、現場で動物の致死処置に向き合う人々の願いではないだろうか。

### 【致死処置について議論する際の心構え】

動物の致死処置に関して、一般市民の中に、心情の揺れや情報の不足による判断の矛盾があることは、考えてみれば当然のことである。理性と感情が交じっているのが一般市民の率直な認識と言えよう。そもそも、動物の致死処置は可哀想だと主張する人が間違っているというわけではなからう。

専門家は、それはそれで優しい心情であると捉えて、ただし、人間社会を成り立たせるために

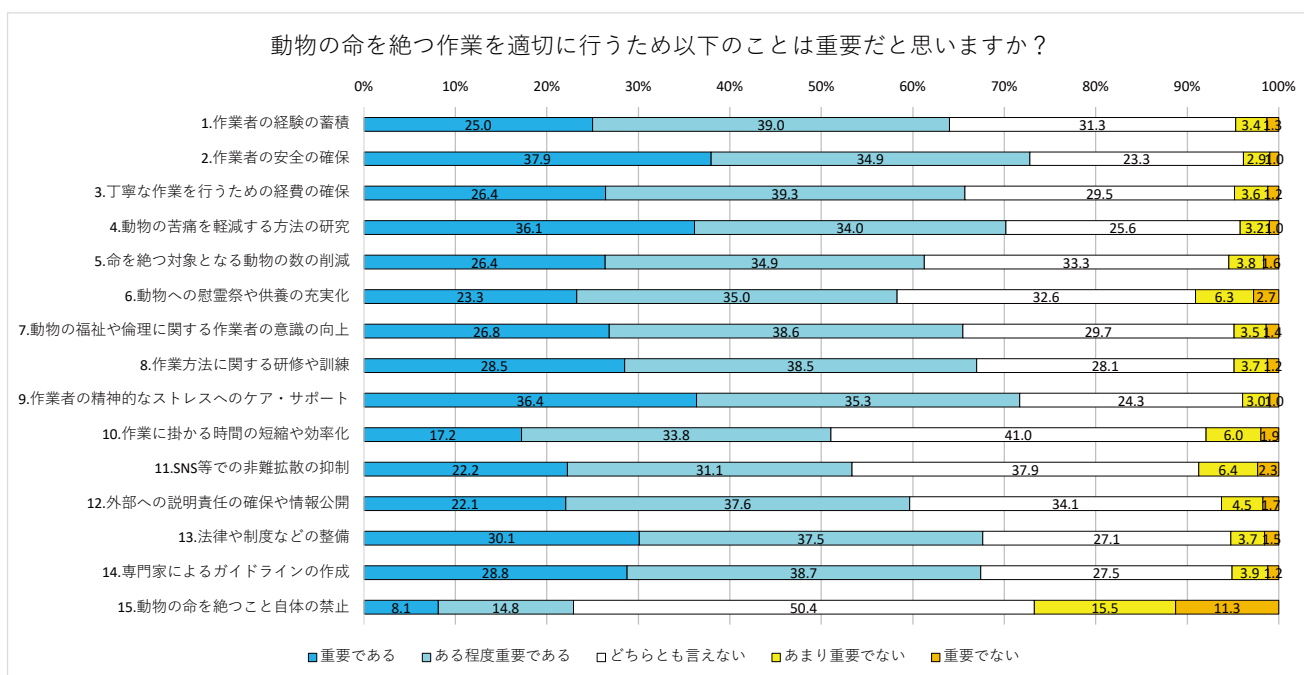


図3 動物の致死処置の適正化に重要なこと